

# 幼 兒 教 育

第 二 十 二 卷 第 六 號

大 正 九 年 六 月 十 五 日 發 行

## 目 次

盲兒童の觀察……………町田則文

子供と結核……………青木醇一

我が園の武者祭り……………四谷第一幼稚園

シカゴ大學附屬小學校……………紹介子

さゝ小舟……………土川五郎

會 報

少年音樂家(三)……………岡田美津

日 本 幼 稚 園 協 會

## 會 告

○會費御拂ひ込みの節は御名前は初め御入會の時の御名前と御同一になし下され度く、例之ば初め幼稚園名にて御入會、後、個人の御名前にて會費御拂込み等のことなき様必ず願上候整理上甚だ煩雜致し候につき右特に御注意願候

○會費未納は會計整理上甚だ困難致候に付確實に御納付下され度向後萬一御不納久しきに互り候場合は乍遺憾雜誌發送を停止可致候間左様御含み置願候

○會員諸君にて御轉居等の節は至急御一報願上候

○萬一本誌不著等のこと有之候折は直に御一報煩し度候

### 本誌定價

一冊(郵稅共)金貳拾五錢 六冊 前金壹圓五拾錢  
十二冊 前金 參 圓 (郵券代用壹割増)

### 購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

大正九年六月十二日印刷  
大正九年六月十五日發行

編輯兼發行者 小 高 齋  
東京市日本橋區岩附町一番地

印刷 者 柴 山 則 常  
東京市本郷區駒込林町百七十二番地

印刷 所 杏 林 舍  
東京市本郷區駒込林町百七十二番地

東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

發行所 日本幼稚園協會

—申 上 ま す—

來る六月十九日午後二時、東京音樂學校大講堂に於て本會及本會の關係者が慈善音樂會を催しますが、其の趣旨と申しますのは、御承知の如く内務省に於ても兒童保護のためには、今や特に一局を設ける程の機運に向つてをりますので、將來は幼稚園も今日の様な不振の状態に打棄て、置く譯には參りませんし、託兒所なご並行して大いに其の發展をはからねばならぬと存じます。就ては私共もこの際奮起して、本會の事業を擴張致したいと思ひ、先づ必要な費用の一端を得んがために今回の企をする次第であります。どうぞ皆様にかせられても、私共の微衷をおくみごりの上、御援助下さるよう切に御願申上ます。

日本幼稚園協會會長

大正九年六月

湯 原 元 一  
外 發 企 人 一 同

— 裏面御注意!! —

# 六月常會

一、時 日 六月二十六日(第四土曜)午後一時半

一、場 所 東京女子高等師範學校附屬幼稚園にて

一、講 演

題 未 定

文部省督學官文學士

塚 原 政 次 君

會員以外の方々も多數お誘ひ合せ御出で下さるよう願ひます。

大正九年六月

## 日本幼稚園協會

# 幼兒教育

第二十卷  
第六號

大正九年六月十五日發行

## 盲兒童の觀察

東京盲學校長 町田 則文

### ○盲兒と幼稚園

現今幼稚園事業は、普通兒特に下層社會の兒童にもつとも必要である事はいふ迄もないのであるが、盲兒童にとつては、之が尙更必要となつて來た。然るに、我國における幼稚園教育の發達を考へて見ると、其發達の當時に於ては、多く上流社會の子供のみを收容して、幼稚園に子供を出すといふ事は、贅澤な事のやうに考へられて居つた。今でも、ある幼稚園ではかくの如き歴史的形跡がのこつて居るといはれないでもない。しかし將來に於ては、我國の幼稚園はますます、下層社會の兒童―家庭で放擲してあるものを收容し、もつて完全なる國民教育を施す準備とせねばならぬ。

したがつて、盲兒には一層幼稚園教育の必要があるので、ことに盲兒は各國ともに、時の古今をとはず貧民社會に多いのであつて、中流以上の社會には比較的少ないといふ事は明らかである。且亦、失明の原因より考ふるも、當歳より五六歳迄の間に失明するものが極めて多く、これ皆、家庭の取扱のわるい事に原因して居るのである。故に兒童を夙に幼稚園に入れて、充分な教育を施す時には、かゝる不幸をまねかずして、未然にふせぎ得る事が多い。當盲學校に於て既に調査したる失明期を見ても左の如くである。

在校生徒百八十四人中、

生れつきの失明者：…五十二人

(男、三十一名、女、二十一名)

一歳にして失明したるもの……二十五人

(男、二十名、女、五名)

二歳 同

……十三人

(男、十一名、女、二名)

三歳 同

……二十三人

(男、十八名、女、五名)

四歳 同

……十三人

(男、十二名、女、一名)

五歳 同

……八人

(男、六名、女、二名)

七歳 同

……五人

(男、一名、女、四名)

七歳以上は一人二人の失明者を存する位の割合で、その失明の時期は大部分かくのごとき有様となつて居る。これが皆家庭の取扱のわるいのに原因して居る。こは、ひとり我國のみならず、世界各国ともに同じ様な實例である。したがつて、貧民兒童の保護保育といふ事は各國ともに盛に唱へられ來りし所以である。故にこれらの盲兒をなるべくその幼少の折に、幼稚園——園といはずとも託兒所、幼稚科等その名稱の如何はこはないが——に入れてこれを保護

する事は實に焦眉の急である。我々盲人教育に携はる者として大いに世の幼稚園當事者にこの事を訴へたい。希くば、盲兒の保育についても、何時かは一度問題として、大いに研究して貰ひたいものである。必ずやこの必要の時期が到來する事を疑はない。もし世上の幼稚園にして、家庭から盲兒の入園を請求せられた時には、幼稚園教育者は、如何なる態度に出づるであらうか。盲目の故をもつて之を謝絶するか、或は入園せしめて保育するか、必ず二者その一を取らねばならぬわけである。

### ○盲人教育の歴史的考察

歐米諸文明國に於ても、盲人のために幼稚園を建てたといふのは、ごく最近のことで、初めは、小學校に於て學齡前の兒童を收容して盲人教育を幼稚園的に實行してをつた。したがつてフレイベル恩物を多少かへて用ひた位であつて、しかしこの當時は普通の兒童と一所であるから、教育上に種々の弊害を伴ひ、充分に盲兒に對する保育効果もあがらずに終つたのであつた。尤もひとり幼兒のみならず、大人ですら盲人は教育不可能なものと、近頃まで見做され

て居つたのである。それが盲人でも一般に學校教育が可能であると考えられ、隨つて國民教育をほどこされるに到つたのは今から百二十年位前からのことで、それ以前には、不可能事として、閑却されてゐたのである。

盲人に學校教育を施す事を實行したのは、實に佛人ワランタン、アウイー氏である。當時は、かの佛蘭西革命の騷亂中であつたが、それにも拘らず、氏は盲學校をひらいて實に熱心に盲人教育に従事した。もつともこの當時同じ佛人で、レッペイといふ人が（アウイー氏の先輩ではあるが同時代の人である）聾啞教育を初めた。實にこの二種の特種教育は何れも佛人の手によつてなつたのである。

一體、佛國は、我國の維新當時にも指南役となつたのであるが、今次の大戦争に於ても、何となく佛國が歴史的に中心をなしてゐる様に思はれる。ヴェルサイユでこの大戦の講和會議がひらかれた事も今後歴史上に特記される一つであらう。ことに大革命前までは佛國は實に世界の中心になつて居つて英人にせよ、獨人にせよ、米人にせよ、日本にせよ勿論佛國に敬意をはらつてゐたと思はれるので、實にこの國が

各國文明の先達となつた様な觀がある。

聾啞教育も、盲人教育も、皆、佛人が其發企者たるのであつて、殊に佛國では、かのルイ九世（*ロウエーン*）の時代から盲人保護といふ事は實行されて居つた。三百人の盲人を收容する、所謂「三百盲人養育院」なるものを設立して、革命時代までは、即ち政府の保護といふわけで、歴史上重要な地位を占むるものとなつた。しかるに院内で盲人を如何に取扱つたかといへば盲人を、何代も何代も、實に、たゞで食はしてをくだけで、教育は勿論不可能として手もつけず、さりとて仕事をさせる事もなしに、ブラ／＼遊ばせて置いたのである。一體、人間といふものは無教育なものほど恐ろしいものはないので、實に亂暴狼藉、虎よりもおそろしい事を敢てするものであるが、是等盲人も、惡徳をつみ來つて、市内を徘徊し、「我こそは天子の代々の免許盲人である」とばかりに威張りちらし、盗みこそはせぬけれども、いたる所に強請して物を得んとし、實に巴里市中の美觀を害し、その亂暴は名狀すべからざるに到つた。ある時は、我が淺草公園の様な所に集合して「盲人音樂會」なりと稱し、彼等自作の聞くにたえざる歌をうたひ、樂譜を倒さ

にかざして、得意げに朗讀し、騒ぎまはるなど、實に不快きはまる、見るにたえざる事も度かさなつたのである。

アウイー氏はこの有様を見て、これを如何にもして教育せんものと思ひ、初めは前述の院内にある年少の盲人七八人を連れ來りて之に教育を施して見た。しかるに其效果著しきものがあつたので、これが動機となつて、氏をしてつひに盲學校設立の大業を敢行せしむるに到つたのである。

盲人の個人的教育と學校教育（一般教育）とはその發展の歴史を異にしてゐるのである。個人的の教育としては、現に近代、獨逸人でのワイゼンブルヒ氏、及フアンバラジース女史の二盲人は個人的の教育をうけて有名な人となつてゐる。ことにバラジース女史は、音樂に妙を得て、演奏旅行をなし、巴里に於ては大好評を拍したのである。これらは個人としての教育ある盲人のよき證據となるのである。各國とも個人としては盲人で學者はいくらかも出てゐる。我國でもかの塙檢校のごときは好例である。個人としての盲人教育可能は何人も知つて居る事である。しかし學校教育として一般盲人に教育を施すとい

ふ事の問題は、アウイー氏をまつて初めて解決されたといへようと思ふ。即ち何れの盲人でも、どんな低能兒でも苟も人間たる以上は、國民教育を與へ得るといふ事を證明し實行したのは、アウイー氏その人であるといはねばならない。當時に於ては、學者は勿論一般の人は不可能なりとして何れも寧ろこの企に反對もし排斥もしたものである。

學校教育と個人教育とは區別して考へねばならぬ。

盲人に關する普通教育すら、上述の様な歴史的順序で發展して來て、日向淺き有様ゆゑ、その幼稚園教育といふ事が充分出來てゐないのは無理からぬ事である。ひとり盲人教育のみならず、普通の教育でも初めは個人教育、それより次第に團體的に一般教育となり、その一般教育も先づ小學校位の程度から初まつて行くのが自然の勢で、それから幼稚園教育にと發達して行く様である。現に我國でも明治維新前は、寺小屋式の個人教育であつた。しかも偉人はなか／＼出たが、當時は國民教育は皆無であつた。國民教育の初まつたのは、實に明治五年、學制發布以來



であつて、したがつて、幼稚園教育などは、尙更新しいものである。今日でも普通教育の問題がなかくよく研究もされ、解決もされて行くけれども、幼稚園教育の問題となると、どうも躊躇せざるを得ぬ有様で、折々、幼稚園保育者大會で決議した事項をもつて見るも、その有様がうかゞはれるやうにおもふ。

初めて、外國で、盲幼兒の保育を實行したのは北米合衆國のマサチューセツ州立盲學校——一名パーキンス盲學校——である。(ポストンより一時間の汽車里程の所にある一大盲學校でその設立に凡そ二百萬弗を費したと云はれてゐる)此處の前校長なる、アナグノス氏(ギリシヤ人)が、かのジャマイカの平原に初めて幼稚園を設けた。全く男兒と女兒とを別にして、教師は男兒部に十人、女兒部に四人で他に、音樂の専任教師と醫師とがあり、全體は八組に別れた。氏の研究の結果、實に、盲兒にても國民教育を授け得る年齢以前にその準備教育を授くる事の可能なのが明らかになされたのである。こは世人の熟知の事であらうと思ふが、かの「我が生涯」をあらはした盲、聾、啞者(ヘレンケラー)女史(今は四十歳位であらう)も、亦、既に數十年まへに故人となつたこれも盲聾啞

者なるロウラ・デ・ブリッヂマン女史何れもこのアナグノス氏の教育をうけたのである。

### ○盲兒ごその保育法

盲兒保育の仕方は、大體、恩物などによるのであるが、自然界に接觸せしむるといふ事が一番大切な事となつてゐる。さて盲兒の家庭に於ける取扱はれ方が二つにわかれる。一つはあまり家庭で愛する餘りに、ことに母親が保護しすぎて、何から何まで世話をし、食物も口に入れてやるし、歩かせるのはあぶないと、負ふてしまふ、少しも自ら活動させないので、そのために兒童の筋肉は發達せず、手足ははたらかず、盲目に加ふるに身體の不完全をもつてするといふ様な有様となつてしまふ。これを防ぐには、自ら歩かせもし、遊ばせもし、いろいろ活動させる事の大切な事はいふ迄もない。今一つは、前とは反對に家庭が全く放任してかまはない事である、一體に貧民社會に多いので、教育どころでなくほとんど手の下しようなない程に何もしらない。これもかくならぬやうに早くから幼稚園で收容すればふせぐ事が出来るわけである。

殊に人類は、五六歳の頃が、一番自然と親しみたい欲望の盛な時で、五官の働きも、きはめて活潑な時期である。この期を捉へて之を利用せねばならぬ。現に我が校でも小さな子供に手工を課して居るが、その喜びは非常なもので、粘土細工にしても、紙細工にしても、熱心と興味とをもつてやつて居る。この喜びを、教育者が捉へては他日の發展に資すべきである。此處に面白い話がある、外國の話ではあるが、ある職工夫婦が一盲兒を持つてゐた。二人とも稼ぎに出るので朝から夕方まで留守である。そこでその盲兒のために晝の食事をそなへ、あたりを整頓して危険のない様にして、戸に鍵をかけて出て行つた、その出る際にいつでも「よくおとなしく留守をしてお出で。室の中のものに觸つたり、こはしてはいけない。おとなしくしてゐれば、きつと明日はいゝものを買つてあげる」といひきかせた。終日働いて歸つて來て見ると子供はちやんとねてゐる。室の内の一物も損してもゐない、觸れたあともない、そこで両親は得々として満足して居つた。何ぞしらんその兒は全く活動する事をしなかつた。一日寝てゐた、食事も床の中でする、歩くのは面倒で、用があれば匍ひま

はつてすます。手も足も働かせようともしない、そうしてゐれば両親からほめられてゐたのである。勿論これはその職工なる両親は教育的知識がないために、その盲兒自身の活動の尊さといふものを夢にも考へてゐなかつたのであらうが、随分可笑な話である。しかしこれに似た取りあつかひを世間でよくして居る事はあるまいか。頭から叱りつけて、たゞ大人しくせよと命じて、子供としての——たとひ盲兒にせよ年齢相當の自己活動は實に豊富であるのに——生活をさせる事なしにおしつけてしまふ。これでは小學校期になつて何か教へようとする時に成績がわるいといふ事も無理からぬ事で、盲人だから頭がわるいといふよりも、小學校期になる迄にのばしてをくべき力をおさへてをいたからいけないといふ事になる。

かゝる弊害に陥らぬようにするためには、どうしても幼稚園に集めて教育するより他に道はないのである。家庭で——ここにその多くが貧民階級にあるとすれば——等閑に附せられてゐるまゝにしてをいでは、將來、決してよくなる見込はないのである。どうしても、幼稚園教育を授けねばならない。普通の

健全の兒童を取扱つてゐる幼稚園の教育精神もこれと同じであると思ふ。いたづらに形式にながれて、幼兒の性質にあはぬ事をたえず強いるようでは、到底その教育効果をあげ得るものではない。幼兒は實に手を、足を、五官を充分にはたらかせて思ふまゝに自然のあらゆるものを彼等の感官のゆるすだけに獲得せしむるようさせねばならない。

### ○盲兒童の身體的特長

盲兒は盲目なるために、すべて心身に悪影響をうけて居るのは勿論であるが先づその身體的方面をいへば、顔貌の醜惡なること、その顔貌の表情及外見の表情(手つき動作など)に快濶の要素を缺く事が著しい。その他、自由運動といふ事が出来なくて、その運動もまことに狭い空間にかぎられてゐる。猥りに他人の手引を依頼する考へをおこす事が多い。この手引といふ事は、初めは仕方がないとしても、少し馴れたらば之は絶對に與へぬといふ様にせねばならぬ。連れてあるく事が習慣になれば、その氣になつてしまつて、何時になつても一人で歩くといふ事が出来ない。何處迄も教育と教授とを刻々に施して、

上述の缺陷を、全くのぞくように、また全くとまでは行かずとも、せめて、軽減するように力を致さねばならぬ。

ことに、手引といふ事は、初めは多少與ふることも、可成的に早く之をやめて、獨立して歩ましめねばならぬ。自分の身體を自分で自由につかつて、起居、進退の出来ないといふ、これほど不獨立な事はないのである。これは盲兒のみならず、普通兒でもさうである。如何に名門富豪の子弟といへども、自分の身體の動作は獨立でなければならぬ。しかるに、學校の往復に自動車や人力車を用うるとき、或は女中の背に、書生の背におぶさつて來る如き、實に子供の自然の發達をさまざまるものである。もつとも、考へない下僕書生などは、足ののろい子供をよちよちあるかせるよりも、荷物のかはりに背負うてしまふ方がどれ位簡單でよいかもしれないので、彼等は、幼兒が如何に驚異の眼をひらいて道々の刺戟を一つ一つとらへ、よちよちと氣ながにあるいてゐる、その刻々にこそ、眞の教育價値があるなどは、夢にも思つてゐない。たゞ女中は早く自分の身が樂になり、よい、書生は一頁でも多く本がよみたいといふ譯で、

さつさと、荷物扱にしてしまふのである。それ雨が降る、今日は風が吹く、何とか理屈をつけて、親達もまたその理屈をよいことにして乗物にのせて子供を送り出す。これは實に子供の活動の尊さを無視した、むしろ無知な非教育的な取扱といはねばならぬ。人間といふものは雨の日は雨の仕度で氣をつけてあるき、お天氣の日には大手を振つてあるく、風の日には風をよける工夫をしてあるくといふ様に、自然の變化に出會つてそのさくべからざる周圍のために必要な練習をするといふ事が實に大切な事で、これが最も自然な教育である。子供は雨が降つたとて決して厭だとは思はない、寧ろ水溜の中をピチャ／＼あるきたがる。かはいらしい傘をさして一人で雨の中をあるくのをどんなによろこぶかしれぬ、雨でこまるといふのは無性者になつた、生活につかれた大人の言草である。最も自然になさるべきよい機會をつかはずに、自動車よ、人力車よといつて子供を荷物がはりに運んでしまつては、まるでこの方面の教育は出来なくなつてしまふ。先生がいくら子供にむかつて「雨の日にあるくのはえらい」といつて奨励しても、家庭が、また附添が、これを理解しないで、歩きたく

てたまらぬ子供を、さつさと荷物にしてしまふ様では、先生のいふことも何にもならないわけである。少し話はそれだが、盲兒をして獨立に歩かしめるといふ事は實に大切な事である事をくりかへして言ひたい。

ことに、盲人が運動をする時は、躊躇と臆病とがいつも伴つてゐる。歩行の際には、兩手を前方にひろげ出し、足を引摺りながら、物に衝突するを避けんとして潜行するを常とし、殊に中途失明のものは尙更この潜行の習慣が多い。先天性の盲人ならば、家庭内にある時に、馬鹿氣た丁寧取扱はれさへしなければ、大概は五六歳以上になれば歩く習慣もついでゐるので、歩行も大膽に出来る。ことに幼稚園なり學校なりに入つた際には、このことについては、ことに緻密な計畫にもとづいた教案によつて教育せねばならない。年齢の長じた盲人が、常に、一定の場所に苦痛をしのびながら坐して居るものが多いのは幼年時代から運動を奨励されることのなかつたために、筋肉が働かなくなつてしまつたのである。したがつて、その永き塾居の結果、新鮮なる空氣の呼吸

が妨げられ、又往々消化不良をおこし、これらに關聯して、種々の皮膚病やら潰瘍病の様なものが発生して來、是等が慢性となつて醫治を必要とするに至るのである。

盲人の容貌が蒼白で、疾病的の外貌を呈してゐるのは、身體に受くべき空氣及光線の作用の不充分の然らしむるものである。筋肉、ことに、脚部の筋肉と、軀幹に屬する筋肉は練習が乏しきたために、軟弱となつてゐるので、盲人の多數は、僅かの散歩を試みても、忽ち、疲勞を來すのであつて、したがつてこれがますます、運動を嫌ふ原因となるものである。

筋肉の活動する事が少ないために、一層多量の溫暖を要求する。これは普通健全な女子に於ても往々目撃する所であるが、老齡の盲婦人にしてつねに室内に引籠り勝ちのものは、度外に暖められた室内、又は澤山の暖衣と、あつい毛入の蒲團などを要求し、尙寒がつて居るといふのも、全く筋肉の活動をさせぬためであらう。

## ○盲人の起居動作

盲人の起居動作は、概して醜惡であると言ひたい。

何となく角ばつてゐて、不手際な事が多い。身體のまげかたなど徒らに強こほきに失し、又、他人と談話する際には、手であたりのものを撫なでまはしてゐたり、著坐するといつても、馬鹿にかたくなつたり、不安定な恰好をしたりして、その姿勢よろしきを得ず、ことに食事などの時には、練習のない盲人などになると、箸や茶碗のもち方、食物の取り方などがなか／＼困難で、内容をしらべるために食品の中に指を入れたり、指頭で食物を口内に運んだり、實に同坐のものが食慾をなくしてしまふ程の不體裁を演ずる事がある。

畢竟するに善良なる教育とは、かゝる不體裁をなからしめて、たとへ盲なりといへども普通人と同様に起居動作が出来る様にする事を目的とすべきである。しかるに、氣の毒な事には、世の教育ある父母にして、これに氣がつかず、かゝる外形的でしかもきはめて重要な方面に注意をばらばらずに、その不幸なる盲兒を育てゝゐるものが多い、大いに反省を促したいのである。

盲人には、この外に、しば／＼醜みにくき、不體裁なる動

作がある。即ち眼窩に指を入れる、蓋し、これによつて日光の快樂を受けんとするためであらう。又、たえず頭を振るとか、上體を動搖するとか、手足をバタ／＼させるとかする。かゝる不體裁な動作を、時には一時間の永きに亙つてつゞけてゐる事がある。普通人の見て不快にたえぬ思ひをさせるのである。

又、盲目は、不潔を誘致する原因で、濫りにいろいろの物品に觸れる。塵埃でも汚物でもおかまひなしである。これは普通人の様に、眼といふ警戒者がないためで何にでも觸れる。實に自己の身體ならびに環境における清潔と不潔とに對する眼の監督が常に缺くるためで、氣の毒なことである。

### ○盲兒の取扱ひを如何にす

べきか

以上の様な不體裁なる習癖を取除くためには、盲兒をして、自分の事を自らさせる様にせねばならぬ。もし、他人から一々の世話をしてやれば、一向盲兒のためにはならない。即ち、盲兒の幼稚園教育、學校教育は、大部分この方面の教育に力をそゝがねばな

らない。而して、これらの習癖は、幼年時代に取除かなければ、つひには習ひ性となつて到底取りのぞく事の出来ないものとなる。世の盲人を見ると、どうも、歩行といひ、談話の體裁といひ、服装の關係といひ、何とほなしに健康人と異つて居るのは、畢竟するに、上述の教育が缺乏して居ることによるのである。

普通の兒童は、よし、教育を興へられずともその有するつよき模倣性によつて、自然に周圍を見做つて教育される様になるけれども、盲兒に於ては眼から來る教育は皆無である。故に一つ一つ何から何まで教育せねばならない。これが實に、盲兒に對して幼稚園教育が必樞である所以である。(談話：未校閱・文責在記者)

### ○心理研究懸賞論文の募集

帝大の心理學研究會では、心理學上の獨創的研究を促すために、毎年一回づゝ研究論文を募集する由で、第一回は賞金を五百圓とし、三種の問題を提供して一般の應募をまつこのことである。詳細の規定は「心理研究」の六月號に發表された。

## 子供と結核

醫學士 青木醇 一

昔は結核と云ふ病氣は、主として大人の病氣であること見做されて居て、小兒には餘り傳染せぬものゝ様に考へられたのであります。然るに近來では、小兒にも結核性の疾患が非常に多い事が知られて來たのみならず、小兒期は特に結核に傳染し易い時期であること云ふ事まで明らかになつて來たので、「子供と結核」と云ふ問題は、近來特に重要な問題とさるゝに至つたのであります。

### ○結核の傳染は小兒期に多い

然るに、未だに小兒には、結核は比較的稀であるとか、或は、小兒には結核の傳染は少いとか、考ふる人が決して少くないのは誠に遺憾に堪へません。近頃では、結核の豫防の點から考へても、子供に傳染させぬ事が最も大切だと迄云はれて居ります。それは、子供が結核に傳染し易いこと大人の結核の多くが其

の小兒時代に傳染したものである事が知られて來たからであります。

### ○結核の傳染は小兒期が多い

現今では、結核の傳染は、小兒期に多いこと云ふ事實は、種々な方面から證明されて居るので、殆んど疑ふ餘地はありません。實際、小兒を檢査して見ても、結核性の疾患は、決して少くないのですが、それよりも確かなのは、小兒の屍體解剖上の結果であります。臨牀上、結核性疾患のある者は勿論であるが、結核以外の病で死亡した小兒の死體を解剖して見るに、意外に結核の病的變化を其の小兒の臟器に認むる事が多いのであります。殊に、肺臟とか淋巴腺などには著しい、そして此の割合は小兒の年齢の増すにつれて多い。之を數字で示して見るならば、

年齢 〇一年 一二年 二三年 四六年 六十年 七十四年  
 結核病竈を有する者  
 (百分率) 一五 四〇 六〇 五六 六三 七〇

之に由つて觀れば、既に滿一年迄の乳兒でも百人中五人位は結核に傳染しておる事が知られる、そして、四年か五年の小兒では其半數以上は、皆結核の傳染を経過して居る事を示しておる譯であります。之とほゞ同様の事實を、私共は屍體でなく、健康に生活して居る小兒に就ても、發見する事が出来る。それは「ツベルクリン」皮膚反應(ビルケ氏法)と云ふ特殊の方法によつて決めるのであります。「ツベルクリン」と云ふのは、結核菌毒から作られた藥である、此の藥を、注射針の様なもので、小兒の皮膚にすり込むと、曾て結核に傳染した事のある小兒では、之に對して反應を起し皮膚のその部分が赤く腫れて來る、然るに少しも結核の無い者は、此の反應が現はれない、之に由つて、吾々は、子供が結核に傳染した事が有りや否やをほゞ區別する事が出来る。

斯様な方法に因つて、小兒を檢査して見ると、丁度前に擧げた解剖上の結果と大體に於て一致した成

績が得られるのである。

年齢 一二年<sup>年</sup> 三四年<sup>年</sup> 四五年<sup>年</sup> 五六年<sup>年</sup> 六七七八<sup>年</sup> 九一〇年<sup>年</sup>  
 ビルケ氏反應陽性の者  
 (百分率) 九二〇 三三 五二 五二 六一 七六 四

此の成績から見ても、人は小兒の時代に大多數結核の傳染を経過するものである事が知られるのである。尤も此反應が陽性である人は凡て結核であると云ふのでは勿論無い。たゞ、其の人が、曾て結核に傳染した事が有るか無いかを知る丈である。結核と云ふ病氣は以前人々が考へて居た様に不治の病ではない、非常に治り易い病氣である。右の統計からも知らるゝ様に、子供が結核に傳染する割合は、非常に多いのであるが、之に比較すると事實結核に惱んでおる者は割合に少い、それは、一は結核は治癒し易い病氣であるためである。一旦傳染したからとて皆症狀を現はして來る譯ではない、其の中には知らぬ間に治癒つて了ふのが随分多い。此の事は、子供の屍體を解剖した場合に結核病竈の既に治癒して居るものを屢々發見する事でも判るのであります。



次に結核には所謂潜伏性の形をとるものが随分多い、即ち完全に治つた譯ではないが、長い間少しも病的症狀を現はさないで居る場合が可なりある。然し之は將來何等かの機會に乗じて、再び病的症狀を呈して來る事がある。殊に其の子供が不攝生な生活法をしておるとか、又は健康を害した様な場合其の虚に乗じて之迄潜伏して居たものが新に病勢を逞しうして來るのである。青年期になつて結核に罹る者の多いのはよく人の知る處であるが、是等の多くは、小兒の頃に傳染したものが長く潜伏性の形で居たものと認むるのが至當である。

斯様に、結核は、小兒の頃に傳染し易い病氣であるから、結核豫防と云ふ様な問題も、小兒に對して特に注意する必要がある。

### ○結核と體質

斯様に結核は傳染し易い病氣ではありますが、子供が健康で、體質が良ければ、決して病氣に負ける様な事はない。一旦傳染しても自身少しも氣付かぬ内に、自然に治癒して了ふ場合が珍らしくない。然し、小兒の體質が劣等で、身體に抵抗力のない場合

は、兎角病氣に負け易い。それ故身體の虚弱な子供は、勉めて攝生に注意し、其の體質を改良して行かねばなりません。昔は、結核を遺傳病だと考へた、今でも随分こう云ふ誤つた考を以て居る人が世の中には澤山ある、併し、結核と云ふ病氣は、決して遺傳病ではない。一つの慢性の傳染病である。但し、人によつて之に侵され易い人と、侵され悪い人がある、それは即ち體質の相違であります。かの、ある一定の家族に特に、結核が頻發するのは病氣が遺傳するのではなくて體質の悪いのである、即ち結核に罹つて居る様な人々の子孫は、矢張り結核に罹り易い體質を遺傳するのである。而し、生來悪い體質をもつて生れた子供も、養育法がよろしければ、立派な體質にかへる事も出来るし、又、全く健康な體質をもつて生れた子供でも、色々の機會で、随分結核に罹り易くなる場合が少くない。例へば、不攝生な生活方法をして居るごか、又は榮養が悪いごか云ふ様な事で、身體の抵抗力は減じ、其の爲めに結核を發し易くなる事も屢々ある。又特に顯著なのは、麻疹や百日咳に罹つた後には、兎角子供が結核を誘發し易い事でありませぬ。

## ○子供の結核は麻疹や百日咳に

### 續發する場合が多い

子供の結核を仔細に調べて見ると麻疹や百日咳に引き續いて起つて來る場合が殊に多い。之は何故であるかと申しますと、麻疹と百日咳とは、多くの病氣の内でも、殊に子供の體質を悪くし、身體の抵抗力を少くする病氣であります。それで、子供が麻疹や百日咳を患つた後には、兎角結核性疾患に傳染し易くなるのである。又、これ迄潜伏性の結核のあつた小兒では、此の機會に乗じて急に結核症狀の現はれて來る事なども決して珍らしくは無い。それから、又、結核に罹つて居る子供が、麻疹や百日咳に罹ると、其の病勢は著しく増進するのが普通である。斯様に、麻疹と百日咳とは子供の結核とは密接の關係のある病であります。それ故に麻疹や百日咳の折には、特に手當をよくし、早く治療せねばなりません。そして、又、輕快後と雖も、他の病氣以上に攝生を守つて、一日も早く健康を恢復し、身體の抵抗力を増す様に勉めねばなりません。斯様な譯で生來良い體

質の子供でも、何かの機會で體質の悪くなる事は決して少くありません。殊に麻疹などは殆んど凡ての子供が罹ると云つても過言でない程に多い病ですから、特に幼兒を持つ母親などは、注意せねばならぬと思ひます。其の外、流行性感冒の後などにも、子供は體質が虚弱となり、結核に侵され易くなると云はれて居ります。

斯様な譯で結核に罹つておる人の子であるから結核に罹るとか、家系に少しも結核患者がないから、結核に罹らぬと云ふ理由はない、結核患者の子供でも、攝生宜しきを得れば、次第に強壯となり、結核に侵され悪くなるし、又生來健康な子供でも、攝生が悪ければ結核に侵され易い子供となるのである。

## ○子供の結核

以前には、結核と云へば直ぐ肺結核とのみ考へたのですが、西曆一八八二年にコッホ氏が結核菌を發見して以來この病氣は肺臟以外に色々の臟器を侵すものである事が知られて來ました。殊に子供には、肺臟以外結核菌に侵され易い器官が多い、大人では結核と云へば肺結核が大部分を占めて居りますが、子

供では肺結核以上に淋巴腺が侵され易い。それで淋巴腺結核が非常に多いのであります。殊に、氣管枝の周圍に散在してゐる氣管枝腺などは、よく侵されます。肺結核を起す場合でも、大人では肺炎結核から初まる事が最も多いけれども、子供では、却つて肺炎の侵される事は少く、先づ氣管枝腺結核を起し、之が進むと其の周圍の肺組織を侵す様になるのが多い。それ故に、氣管枝腺結核の頃に早く診斷を確定して治療する必要がある。其の他頸部の淋巴腺などが結核に侵され易い事は一般に知られておる事實である。彼の所謂腺病、俗に云ふ瘰癧などは、矢張り之である。(最も世俗で云ふ腺病と云ふものゝ内には結核性でないものが随分多い)。

其の外子供の結核として屢々あるのは、彼の結核性腦膜炎であります。之は大人には少い、又年長の子供に比較的少く幼児に最も多い、又、結核性肢關節炎なども子供に特有なもので之も三、四歳位の子供に屢々見らるゝ病氣であります。斯様に子供の結核は大人とは色々變つた點のあるものであります。

それから尙一つ子供の結核で注意しておき度い事は、子供が年少であればある程結果の悪い事です。乳

兒などは結核にかゝれば凡て死亡すると迄云はれております。従つて幼少な子供程傳染させぬ様に保護してやらねばなりません。

### ○結核の症候

前にも述べた様に、結核と云ふ病は、決して不治の病ではない、否、寧ろ治し易い病氣である、而し病が進行した場合には、極めて癒り悪くなるのが特徴であります。夫れ故、其の初期に當つて、適當の治療をするのが最も肝要です。然るに、結核の初期は、一般に極めて徐々に起るので、屢々看過されることがある。そして、氣のついた時には、可なり病の進行した場合であることが決して少くない。殊に、子供では、母親などが餘程注意して其の健康状態を観察して居ないと、看過する場合が多い。それ故、初期の徴候を一應心得て置く事は最も大切な事と信じます。

勿論結核の初期と申しても、侵された器官によつてそれ〴〵異つた症状を示すものであるが、大體の一般症状はほぼ一致して居ます。それでこゝには初期の一般症状をごく簡單にお話しておきませう。先づ第一に別にこれと云ふ原因もないのに、子供の元

氣が無くなる、平素機嫌よく遊んで居た子供が、何となく不活潑になる、或は不機嫌になる。それから食慾が減じて来る。其の内に追々と顔色も悪くなる、續いて瘦せが見えて来る。勿論是等の症状は極めて徐々に起るので、母親に氣付かれない場合が随分ある、斯様な際に子供の體温を測つて見ると、多くは平温よりも多少高いのが普通である。斯様な症状を發見したならば早く醫師の診察を乞ふ必要がある。此の頃に適當な治療を施せば、割合に早く治癒する事が出来る。

### ○結核の豫防と手當

次に大切な事は結核の豫防法であります。前にも述べた様に、結核は小兒期に多く傳染する慢性病ですから、結核の豫防法を講ずるには、子供に傳染させない様にするのが最も肝要と云はねばなりません。豫防の方法としては、第一には出來得る限り傳染の機會を避くるにあります。それには結核患者と接近せぬ様にせねばなりません。殊に結核患者と同棲する事は最も傳染の危険が多い譯ですから、家族の内に結核患者のある場合などは、たとへ骨肉の間

と雖も患者と他の健康な家族とは互に隔離する様にせねばなりません。殊に子供が幼少であればある程病氣は危険ですから子供は決して結核患者に近づけてはなりません。次に豫防に必要な事は、子供の身體を丈夫にして抵抗力を増す事であり、兎角身體が虚弱だと結核に侵され易いけれども、丈夫であれば容易に侵されない、傳染の機會はあつても結核菌の侵入の餘地がなくなり、子供を健康に育てる上には、種々の注意が要りませうが、殊に結核に對して抵抗を強くする上に、最も大切だとせられて居るのは、榮養と日光と空氣の三つであります。そして結核の治療の際にも此の三つが最も大切な要件であります。それ故に結核に罹り易い素質をもつた子供や、腺病質の者には特に是等の點に意を用ゆるがよい。食物は出來る丈滋養の多いものを選ぶがよい、そして體力を増し結核に對する抵抗を強くする様にせねばなりません。次に日光に浴する事が必要です。それで暖かな晴天の日などは、可成戸外に出して遊ばせるがよい、子供の日常起居する部屋は南向の一番光線の入る部屋を選ぶがよい、たまにしか使はぬ客間に日當りの宜い部屋を選び、子供には北向きの

暗い部屋を當てるなどは、子供の衛生を無視した仕方です。次には新鮮な空気を呼吸させる事が大切です。不潔な空気がかり呼吸しておると、遂には呼吸器を傷ふ事になります。それには矢張り室内にばかり

## 我が園の武者祭り

五月四日午後一時より本園の武者祭をいたしました。昨日から降りつゝいた雨は、今日も未だ晴れません。お庭に立てられた幟竿には、鯉も吹流しも付られませんが、幼児の登園にも困ることゝ朝から空のみながめて晴を祈つてをりましたが、とうとう少しも止らずに降り通しました。しかし幼児は此雨にも元氣よく續々登園、思ひの外の出席多數でございました。朝の會集がすみましてから、自由に遊び十一時ごろお辨當にいたしました。零時半からそろそろお支度をして、一同遊戯室にはいりました。こゝは今日の餘興場でございます。室の三方に紅白の鯨幕を張り、正面には舞臺ができて、天井には各國國旗

り入つて居てはいけない、新鮮な戸外に出してやらねばなりません。是等の點は家庭のみならず、幼稚園や小學校などでは一層注意せねばならぬ事柄であります。

## 東京市四谷第一幼稚園

が飾られ、常に見る室とは別に見へました。園長先生が之から武者祭の餘興をみなさんでしていただきませうと仰せられました。一同おとなしく待つて居ます。やがて松の組(年長兒)の良三とさぞうさんの御挨拶、にこゝととしていかにも嬉し相でした。次に梅の組(年少兒)の男兒三人鳩はつぽの唱歌、之は本年の新入園兒で、しかも小さいのに聲も大きく上手に出来ました。次は砂遊びの遊戯、(松の女)聲がちいさかつたので折角可愛らしい歌が、よく聴とれませんでした。次は牛若丸と辨慶の動作遊戯で、秀夫さんの牛若丸が白い被衣をかぶつた立姿の可愛らしさ、武者人形から抜け出て來たかのやうでした。薫さんの

辨慶は能く太つて、體格も立派で、彼人物も斯やと思はれました。初は薙刀を持つて「京の五條の橋の上」と勢よく歌ひ出しましたが、だん／＼力が抜て弱そうな辨慶になりましたが、終りにあやまるのですからまづよいとしておきませう。次には可愛らしい梅の男女四人でポートをこぐ、正夫さん(五歳)が小さい口をあいて之からポートをござますとはつきりよく云ひました。みなよく揃つてピアノの音に合せて無邪氣に手を動かす有さま、實にかはゆらしくお人形のやうでした。良三さんの舌切雀のお爺さんは齒が抜てゐてにこやかで其人らしく、花ちゃん福ちゃん光ちゃん雀さんも可愛らしくよく出来ました。お爺さんが歸る時にお腰をまげるのを忘れて姿勢正しく杖をステッキのやうにして急いだのも滑稽でした。義行さんの獨唱「桃太郎さん」は上出来、薰さんの金太郎さん、兎と熊の満之亮さん進弘さんのお角方も大出来でした。唱歌「笹舟」これは松の男女四人にて一番は男に、二番は女に、三番は合唱にしました。之も能く歌ひました。梅の悦三さんは小さいのに自分から獨りで歌ふと云ひ出したゞけに、「桃の中からひよつくり」とあの長い歌を少しもまちが

はず思ひ出してはごろ／＼にもみぢのやうな手をあげて動作をする、其可愛らしい様子にお客様方も感心していらつしやいました。おしまひの御挨拶は薰さんです。元氣よく舞臺に上り口上をちよと云ひちがひましたが、すぐ云ひなほして少しもおくせずおちついて居ましたので、實に嬉しく思ひました。園長先生が之で皆さんの餘興はすみました。之から後藤先生の面白いお噺を静かにして伺ひませうと仰せになりました、お噺好の幼児はおとなしくきいてをります。「五うろつき」と云ふおもしろいお噺でしたが、「働らいて出た汗が小判に成る」といふ、幼児には意味が理解されなかつたことゝ思ひます。

併お噺が進むと共に繪が變化するので、今度は何に成るであらうかと楽しみに興味を以てかなり長いお噺を喜んでききました。お噺がすみましてから、一同お菓子頂きました、園長様も後藤先生も一所に召し上つて下さいました。おみやげにはお細工の花菖蒲をいたゞいて、みな／＼大悦びでそれ／＼家に歸りました。百名餘の幼児がめい／＼あの小さい口からお母様になんと報告をするであらうと思へば、微笑を禁じられませぬ。今日は雨天にもかゝらず、後藤先生も御遠方お出で下さいましたし、園長様も御用多の中を幼児のためにお出で下され、又當區第二幼稚園の先生方、幼児のお母様方も多數御出で下さいまして誠に賑かな武者祭でございました。

# シカゴ大學附屬小學校

——幼稚園と小學校との聯絡問題 (二)——

シカゴ教育大學助教 アリス、テンブル女史 述

艶 子 譯

## 一、聯絡に都合のよき状態

シカゴ大學附屬小學校の學級は比較的小さい。幼年級の一組の兒童數は三十五人を越えない。音樂、圖畫、手工及體育のためにそれ／＼専任教師があり、これらの授業のためには組をまた二つにして、十八人又はそれ以下の人數としてその教育効果を大ならしめて居る。ある教室には、小さい集合室グループルームがついて居る。そして、體育運動のためには、運動場、體操場がある、また特に音樂室も仕事場もある。それ故に二組を同じ室に入れて、仕事をしなければならぬ。といふやうな必要は決しておこらない。

室の椅子、こしかけなどは自由に持ち運びが出来、適當な器具は勿論そなへてある。一年級の室に備へ

てある器具は幼稚園の保育室におけるものと殆ど同じである。それ故に、幼稚園から大變かけはなれた所へ来た様な一年生の兒童も、全く、今迄の幼稚園に居つた様に思つて居る。その内でなされる活動もまた同じである。彼等は畫いたり、粘土細工をしたり、いろ／＼積んで遊んだり、遊戲をしたり、お話を聽いたり、また自由談話をしたり、歌をうたつたりする。讀方教授の様な秩序的のものでも後にのべる様に、生徒は容易にうける事が出来る。更にその受持の先生がまた彼等には見知らぬ人ではない。先生は彼等が幼稚園に居る頃から、遊戲の時などいつも一緒になつて運んで呉れたその先生である。音樂の先生も亦、これまでよく幼稚園に来ては、一緒に歌をうたつてくれたその先生である。その學級の日々の

時間割はもとより多少幼稚園よりも固定的にする必要はある、音楽とか手工、その他を特に教へるためには、けれども、一般の空氣は、實に自由な、形式にとらはれない、それこそ幼稚園に於ける如き、氣のおけない、家庭的なものである。

四年級以下の五人の各級の教師は、すべて、小學校を教へる教養を有するとともに、また、幼稚園保姆としての教養をうけて居る。同様に二人の幼稚園保姆も小學校を教へ得る資格がある。

學級の大きさが、いろいろにかはるために、小學校下級の先生方は毎年同じ學級をきまつて受持つといふことはしない。ある時には二年級の多人數の組を受持つが、また他の年には、一年級又は三年級——これらの級はつねに多人數の組である——を受持つことになる。もう少し詳しく云へば、一年A組及一年B組の教師が、ある學課を教へるために二年級又は三年級の午後の課程時間アフタヌーンセッションに招かれる——この時には一年級は出席しない——。或はまた、ある一年間を二年A組及三年B組を教へた先生は、翌年には二年B組及二年A組を受け持つといふ工合になつてゐる。多くの教師の中の一人は、三年間引續いて同じ級を

受持つ。すべての教師はお互に實際的に他の級の教室を參觀する。かゝる經驗は、教師をして自分の受持つ級以外に上級及下級の學級の教科に直接に接觸せしめ、聯絡を保たしむる上に大なる便益がある。そして必ずまた、教科の主題及その方法の上に、學校生活の各方面の状態の上に、一層の聯絡を得る助けとなるのである。また、音楽とか體操とかの専任教師は各級受持つ教師と密接に調和を保ち、かくて一方、各級の程度を保ちつゝ、他方、その相互聯絡は望まれるのである。

## 二、學課目

幼稚園と初等年級とを、實際生々と聯絡させ關係させようと思へばその最も有效なる方法は、先づ根本に於て學課目の統一的編制といふことにあらうと思ふ。事實上、この期の兒童の心理研究の結果はかかる方針を要求して居るのである。この期全體を通じて共通な、ある本質的の傾向及特性がある、學校はこれを考へねばならぬ。即ち、

一、この期の兒童は、きはめて模倣性に富んでゐる。また、たへずそのうける社會的のさまざまの經



驗を模倣的に、ドラマチックプレイ演劇的遊戯にあらはして之を説明しやうとつとめる。

二、兒童は何でも感覺に訴へたがる。これ故に、種々の材料を取扱ひ、また道具——大工道具の様な——などをつかつて實際に經驗して見る事を喜ぶ、かくて彼等がやゝ、道具もつかふことが出来、手先も機用になると、自分達の遊びの考案に適當する様な物——もとより粗雑なものではあるけれども——をつくるようになる。かくの如く、ある物を工夫し、之をつくるといふことは、たしかに、初歩ではあるが「問題プロブレマチックを解く」といふはたらしきを含んでゐるのである。

三、この期の兒童は、非常に社交的であるといふことは、彼等が、如何に友達を求め、又如何に友達と遊ぶことを喜ぶかといふことでも、いかによく熱心に喋舌るかといふことでも、如何によく彼等の仲間仲間のすることをしようとするかといふことでも明らかになる。

四、最後に、兒童は、その生活器官及筋肉を善良なる状態のもとに練習させるために、一種の生理的活動を要求するものである。

キンダーガーデン、ファーストグレード幼稚園Ⅱ初等年級の學課目は、先づ考への第一歩として兒童の上述のごとき基本的の必要及要求にしたがつて編制さるべきものである。兒童の自發活動を助長し、その要求を満足せしむるために、或は種々の材料を供給し、或は、機會を與へるよう企て、又、種々の方面において兒童の經驗をひろめ、自ら支配する力を生ずるようするために、獎勵的な、必要な指導を與へるよう心掛くべきである。

幼稚園及初等學級を通じて繼續すべき活動の二つの重要な様式を、簡略にあらはすといふことは、即ち學校生活の最初の二三年間に、兒童の經驗が如何に連續して保たれたかといふことを説明するのに役立つのである。即ちその二つの活動とは、(一)戲曲的手工的の活動、(二)言語活動ロジック、スピーチ、ドラマ(話さうとする活動)といふ標題であらはし得ようと思ふ。遊戯、競技、音楽、繪き方などは、またこの同じ原理の中に編みこまれてしまふ。

「團體生活コミュニティ」といふとは通常多くの遊戯的興味を中心とするものをふくむ言葉として用ひられてゐる。兒童はある形式の社會的生活に入らうとねがふ、

即ち彼等の有する構成的及模倣的の遊戯に於て、社會生活の特に興味をひいた方面を模造してあらはすことをよくする。よく、都市の兒童が、商店遊び、汽車ごっこ、馭者遊び、その他のまねごとをして居るのを見かける。彼等はいふ遊びの際に、人形とか、その他の玩具を、實にたゞ彼等の欲する目的に、誠に手近に、たやすく使用してしまふ。椅子をならべて汽車にする。室の一隅においてある「ソファ」の後に出來た空間をすぐお家にする、などはよく見る事がある。

### 三、いろいろの考案

幼稚園の保育者は、その出發點に於て、上にのべた様な強い戲曲的構成的の興味を實際につかつて行く様にすべきである。兒童は、初めて學校に來た時に、その室には、澤山の面白そうな玩具とか、いろいろの遊具が置いてあるようにする。例へば、人形、人形の寢牀、人形の椅子、著物など。或は飯事道具、汽車、荷車、大きな牀上積木、粘土、紙、鉢、糊、畫の道具などをそろべて置く。子供等は、かゝる澤山の玩具、遊具の中から、自分に好きなものを選んで、自由勝

手に初めの五六日を過ごす。かうしてゐる間にやがて彼等はいろ／＼の材料を取扱ふ事が出來、またその能力の程度もわかる様になると、此處で教師は、彼等の自發的に始める遊びに指導を與へる事により、又、巧みに暗示を與へる事によつて、次第に、その活動をその全團體の教育案の形式になつて組織され限定されて行くように導いて行く。例へばこゝに幾人かの子供が大きな牀上積木を持ち出して、牀の上で遊ぶ事に非常に興味をもつたとする。一日二日の間、彼等は積木でいろいろのことをして見る。遂にその中の一人が椅子をつくつた。この事がこの子にも、また他の子にも椅子より他の家具をつくらうといふ暗示となり、やがて彼等は皆椅子、テーブル、寢臺、ストープなどをつくる。しかもそれは子供等がつかへる程の大きさのものである。

やがて彼等は、お互に他の領土を侵略し始めてここに場所争ひがおこる。この時、先生は、牀上に白墨で線をひいて、一人と隣の子との場所の界をたてる。そうすると、これが彼等に「室」といふ事の暗示を與へる。かうして今仕切つた場所は、となりあはせに次々にならんでゐるので、「これは一軒の家にい

ろ／＼の室が幾つもある」といふ暗示を與へる。そこでどの室が必要で、どの室にはどんな道具をおけばよいといふことで、一しきり議論がおこり、そしてまた、たちどころに、相當な家具をそなへたいろ／＼の室が出来上る。ある子供は室の區切をあらはすに牀の上にひかれた白墨の線だけでは満足出来ず、更に、これを安定にするために、長い積木をならべる。すると隣の室の子が、「入口がいる」といひ出す。そこで先の子供は、「短かい積木にとりかへて入口をあげる工夫をする。

この「まゝごと遊び」に於て、演劇的の遊戲は臺所とか、食堂とかいふものに興味づけられて、そこで料理道具がほしくなる。この時、先生は新しい粘土やまた嘗つて兒童がつくつた粘土細工の道具などを與へると、彼等は大よろこびで、その場合に應じて、藥罐とか土瓶とか、コップとか、皿とか、好きなものをつくる。ふと一人の男の子が、女の子に向つて、「僕ね、あなたのお鍋の中に豆を入れてあげやう、煮て下さいね」といひながら粘土をちぎつて小さくまるめ始める。先生はこの機會を捉へて、「お料理するのにつかふものは何處からとつていらつしやるの?」と

いふやうな暗示を與へる、すると彼等は八百屋を思ひつく。二人の男の子がこの店をつくらうと著手しはじめる。外の子等はいろ／＼とその出来ばえを議論する、あれこれ皆が意見を言ひあつて、やがて立派な店が出来る。出来上つた可愛い、店には粘土でつくつた果物や野菜がならべられる。ならべて見ると、八百屋にはあれもおかねばならぬ、これも賣りたいといふので店がせまくなる、そこで彼等はありつたけの積木を皆つかつて大きな店をつくらうといふ相談をまとめてやり出す。

このやうに、ある兒童がその計畫を次々に實行して行く間に、また他の一組の兒童は、先生から頂いた、紙細工クラフトの家でやはり「まゝごと遊び」をしてゐる。こちらは初めは積木をつかつて家具などをつかつてゐるが、やがて八百屋遊びがおもしろくなつて来る。そこで先に八百屋をつくり始めた仲間と聯合して、此處に大きな建物をたて、兩方から持ちよつて澤山の商品をならべることになる。かくてこの計畫は、やがて、商品の仕入れとか、店頭ショウウィンドウの陳列とか、賣り買ひの方法など、といふ内部の手配が大切であるといふ所まで發展して行く。そこで、僕は仕

入れる人になるとか私は賣り手になるとかそれ／＼にその手腕にしたがつて自分の役目をきめる。品物を入れるためには大ききのいろ／＼な箱や袋がいる。罐や瓶のやうなものも工夫される、粘土製の果物や野菜もそれ／＼よくわかる様な特長ある形につくり又著色もする。値段をかく札があるのでそのためにも大ききもそれ／＼に考へて紙片を切つておかねばならぬ。買物籠や、運ぶための車もつくられる。そしてまた、買ひ手のためにはおもちやの金銭や紙入もつくられる。

かくて用意萬端と、のふと、こゝに「賣買ごっこ」が始まる。紙細工の家からは、お母さんが手に紙入をもつて出かけて来る。番頭さんは帳場にすはつて客の應待をする。時にはまた電話で注文が来る。かうしてしばらく遊んだ後、彼等は次の様な對話の歌をよるこんで歌ふ。

母「もし、もし、どうぞ、下さいな、

麥粉一囊下さいな。」

番頭「はい／＼、あげます。おさげします、

一時間内におさげします。」

母「ひやうなひやうな。」

### 番頭「さやうなら」

この外に、子供がめい／＼に紙入形をつくつて、これを中心としていろ／＼の遊びをする。例へばクリスマス祭をしやうとして、クリスマスツリーの裝飾やら、客間の工夫やら、贈物のこと、招待のことをいろ／＼考へ、更に今度は家を幾軒もつくつて、こゝに團體生活を實現し、此處は教會、此處は學校、此處は商店此處は消防隊など、區別する。かくて彼等の遊びは次第に進んで行くのである。かうして行く中に子供は、また、すぐに市街のいろ／＼の設備といふ事に氣がついて、人道車道の區別やら、街燈の事にまで暗示されて行くようになる。かうして一方に彼等は日常生活の豊富な刺戟に加へて、遠足をしたり繪畫を見たり、説明をきいたりして、彼等の知識は日々に増すと、ともに、他方には多様な演劇的の活動やいち／＼しい構成の能力によつて、彼等はいつもその興味のある所をあらはす機會を與へられるのである。

花壇に植物を植えこれを世話することや、雛をそだてることなどは、自然を経験させる上に大切なこ

としてこれがまた計畫されてゐる。

上述の様な遊戯活動によつて、彼等はたえず新しい觀念、新しい意味を獲得し、またその得た觀念を彼等の遊びの目的の方にもつて行くその力が、發展して来る。この、觀念支配の發達とともに、言葉の發表といふことが觀念發表の具として平行して進んで行くといふことが大切である。比較的多くの觀念の獲得と、それら觀念に相當する言葉を知るといふことは、知的に、「讀み方」を學習するその方法の端緒である。

子供が印刷された言葉と、それに關する意味を學ぶ場合には、先づもつて、その相當する言葉の發表即ちその言葉の響をその意味と結びつけねばならぬ。初め、子供は、印刷された符號からその意味を知るといふことになるには、たゞ口でいつて示すといふ方法によつてのみ出来るので、それ故に、幼稚園では、かゝる種類の經驗を充分に與へ得る様に用意する事が大切である。もし子供が、かゝる經驗をつまずに、小學校の一年生になると、學校の方では、讀み方を有効に教へることのまへに、先づ上述の經驗

を充たすために時をとらねばならぬこととなる。

小學校一年級では、このいろいろの遊びの計畫は、たゞ幾分團體生活的の形式をとつて一層手練巧みになされる。幼稚園を通つて來た兒童は一年もまへにしてゐたまゝの遊び、商賣ごっこ、などを思ひ出し、或は夏に遊んだ田舎や農家の經驗などをくりかへして遊びの中にあらはずことに興味をもつのである。學校園内に産する食物のことを兒童に知らせれば、彼等の興味は、たやすく田園生活とこの家族的なそして共同的の生活の特長を面白くおもふようになる。やがて、彼等は、砂場に、牀上に農場を模造し、いろ／＼の建物、それ／＼の花園、田畑、垣根などをつくる事に趣向をこらす。また必要な動物は玩具をもつて來てならべたり、粘土でつくつたりする。

### ○自由遊戯と自由作業の時

上述の様な様式の作業とともに、また一層自發的な又目的ある活動をさせるために、小學校の教師等は、ある準備をしてやらなければならぬといふことを感じて居る。即ち幼稚園におけるごとく、全然兒

童の自由選擇にまかすべき種々の材料をそなへ、その活動も、その考案も、實に彼等の思ひのまゝにさせてやるようにと苦心する必要がある。それ故に、時間割のごときもそのつもりでつくつて一週間の中で兒童が、玩具やその他の材料を自由勝手に用ひ得る時即ち自由作業とも云ふべき時をなるべく多く與へる様にするのである。この自由作業の材料としては、紙細工の材料、畫き方、書き方の材料、粘土、木片及大工道具、裁縫道具、人形、繪、お話の本などが主なものである。

兒童は、めい／＼必要なものを出して遊び、後始末はまた、すばやく自分でする或時は一人で一心にしてをることもあり、又は小さな紐になつてすることもある。この時に先生は必要に應じて助けてやり、又は暗示を與へてやる。また、氣力の少ない子供は之を上げまして、何にもせずにはんやりとすごしてしまふことのない様に氣をつける。それからまた、一人一人の子供同士また組をつくつてゐれば、その一組と他の組とお互にその仕事を語りあつて、互に他から多くの暗示をうける様な時間をこしらへる。この時間こそ、先生に一番大事な時で、兒童の興味と

その能力を深く洞察し、一人一人の異なつたその個性にもとづいて一層考へぶかく用意するといふこともこれによつて出来るのである。また、彼等の獨創的な、他にたよらない考と、その活動を一層發展せしむるために有效な方法を得るにも大切である。且、亦、この自由作業とその自由の度に從つて社會的制裁といふこともわからせることが出来る。(未完)

## ○日本幼稚園協會夏期講習會

本會主催のもとに今夏、文部省保育講習會開催の期間中、凡そ一週間土川五郎氏の「律動遊戲及表情遊戲」の講習を致します。御希望の方は當日迄に本會宛御申込み下さい。  
(但し會費金壹圓。開會當日御持參の事)

# さ、の、小、舟

(日本幼年大正七年四月號)

5. 5 3 2 | 1. 1 2 | 3. 3 5 6 | 5 .0 | 6. 6 5 | 1. 1 6 5 | 3. 3 2 1 2 | 3. 0

1. オニハノイケノ マンナカヲ ボクガ ツクッタ ササノフチ
2. あなたの つくった ささのふね わたしの に入りやう のせてやーり
3. キレイナ キレイナ ササノフチ カゼモ ナイノニ ハシルノーハ

5. 5 3 2 | 3. 3 2 | 3. 3 5 6 | 5 .0 | 1. 1 1 6 | 5. 3 5 | 3. 3 2 2 | 1. 0

ソヨソヨ カゼガ フクタビニ スイスイ スイト ハシリユク  
 あーかき つばきの はなそへて むかふの きしへ おくりませう  
 アレアレ キンギョガ オシテユク アアオモ シロイ フナアソビ

## 表情遊戯

### 笹舟

(日本幼年より)

土川五郎

圓心に向く

一、お庭の池の 兩手を兩側より前方へ抱く如くして圓を作

り。  
まんなかを いけにて左手を真直に掌を上にし次に右手を

掌の上に五指を上につぼめて左掌にのせる。

僕の作った 左手は下ろし右食指にて鼻を指す。

さ、の舟 兩手の掌を上にして兩手を體前にて揃へる。

そよそよ風の吹くたびに 兩手を體前にて向き合せて左右  
に振る。

スイスイスイと 左足一步左へ摺り出し(膝を屈し)直ちに

右足をつけ次に右足を一步斜右へ摺り出し直ちに左足を

つけ、かくすること四回、兩手は掌を合せ(掌中をやゝふ

くるゝ如く)肘の屈伸を左右足の動作を合せつゝ行ふ、摺

足にて出づる時上體を出でたる足の方へ稍く傾くる如く

す。

走りゆく 拍手しつゝ三步後退す。

二、あなたの作つた 上體と共に頭を左右を見る如く交互に傾くること四回。

さ、の舟 兩手を揃へて體前に出し掌を上輕輕く左右に揺かすこと三回。

私の 右手掌を自分の胸にあて。

人形 人形を抱ける如くす。

のせて 左足前膝を充分に屈し兩掌を上に向け人形を舟へのせる如くす。

やり 左足を引き體を伸ばす。

赤い 左手を體前真直に掌を上に向けて出す。

つはきの 右手を體前真直に掌を上五指をつぼめて出す。

花そへて 右手を左手の上ののせて直ちに元位に復す。

向ふの岸へ 右食指にて前方を指す。

送りませう 右足一步前へ膝を屈し兩掌を體の前方に向け五指を下げ舟を送りやる如くし、せうにて右足を引き兩手を兩側に垂れ膝を伸ばす。

三、きれいなきれいな 上體をやゝ左方に向け拍手一回次に右方に向け拍手一回。

さ、の舟 兩手を體前に掌を上二兩手を揃へ左右

に動かす。

風の 右手を高く右方へ上げ右斜上を見る。

ないのに 左にて同じ表情をなす。

走るのは 内方池を右食指にて指す。

あれあれ金魚が 兩手を兩股上におき膝を屈し上體をやゝ前方に屈し池を見る如き姿勢にて四歩前進す。

おしてゆく 兩手の掌を合せ左右の甲を上下にし

金魚が漸く舟を口にて押す如く、兩手を僅かに前後に動かして、靜かに前進す。

あ、おもしろい 拍手して、四歩後退す。

舟 兩手を體前より左右に開く。

あそ 兩手を體前に(下方より弧を描きつゝ)

び 再び左右に(上より下側方に)開きて元位に復す。

日本幼稚園  
協會主催 大音樂會

別項豫告の通りの趣旨で本會は来る六月十九日午後二時より東京音樂學校大講堂で音樂會を開きます。多數御勧誘の上御來會の程希望いたします。(プログラムは巻末にあります。)



# 少年音楽家 (三)

東京女高師教授 岡田美津

## 三、谷

六月の日の長い黄昏が夜に變はつても一向に暗くない程、月の光が冴えてゐた。家の方から見渡すと、納屋も、その先の低い小屋も、薄暗くポツと美しく浮き出て居た。多かつた一日の用事がうまく果せたので、今こそ心置きなく身體と精神とを憩められると新右衛門夫婦は、家の横手の縁に坐つた。

新右衛門が戸内へ入らうと立ち上つた拍子に、ブーンと長いバイオリンの音が聞こえて來た。

「お前さん、あれや何。」と内儀さんが大聲を出した。良人は返事をしないでその眼は納屋を見据ゑてゐた。

また一音鳴り響いたので、

「御前さん、バイオリンだよ、宅の納屋で。」と御内儀さんが叫んだ。

新右衛門はきつとなつた。忌々しげな聲を出して、

彼は縁を横切り、臺所へ入つて、すぐと、火を點じた提燈を持つて戻つて來た。

「御前さん——御止しなさいよ——何が居るか分らないから。」と御内儀さんは慄へ聲で制めた。

男は劍突を喰はせた。

「バイオリンは手が無く、ちや弾けないや。御前おれを見せにやらねいで酔漢ひの、途方もねい旅樂師の野郎に、うちの納屋を取られてもいゝッていふのか。先刻歸り途に路傍でいゝ格好の二人連を見掛けたよ。大人と子供でな、バイオリンを二挺持つてゐたつけ。彼等の所爲だらう大方。——こんな所までどうして奴等やつて來たか、解らねいがな。あんな宿無者達に納屋を使はれてかまはねいかよ。」  
「構はないつて事はないが。」と御内儀さんは臆したやうに云つて慄へ——立ち上り、裏庭を向ふと夫

の影を追つて行つた。

夫婦は納屋へ入ると思はず立ち停つた。バイオリンの音が急調に顫音に、快調に、四邊に充ち満ちて居た。怒りの聲と共に新右衛門は狭い階段から屋根裏に登つて行つた。内儀さんはすぐ後に引添つて居たので、夫とほとんど同時に、月光をまともに浴びて枯草の上に横臥してゐる男を見付けた。

忽ち樂の音が細々となつて低い人聲が闇の中——屋根の明り取りから眞四角に射し入る月光の及ばぬあたりから聞こえた。

「どうか、なるだけ静にして下さいね。この人今眠つてゐます。大變疲れてゐるんです。」とその聲が云つた。

階段の上の男も女も呆れ驚いて、しばし足を停めた。それから、男は提燈を差し上げて聲のする方へ、のさ／＼歩いた。

「貴様は何者だ。こゝで何をしてゐる。」と鋭く答めた。

少年の圓い日に焦けた、幾分心配さうな顔が闇の中にはっきり映つた。

「あのどうぞ、もつと小さな聲で仰つて下さい。」と

彼は哀願した。「この人は大變草臥れてゐるです。僕は民雄で、之は父さん。こゝへ來て休んで眠んです。」

新右衛門は、打解けない顔を少年から移して、草の上に仆れて居る男を見渡した。彼は忽ち提燈を低くし、用心深く片手を伸して、低く身を差し寄せた。そして口の内で素氣なく何か言つて、身を起こした。それから腹立たしげに、

「こゝら、貴様、こんな時に何だてバイオリンで舞蹈の曲なんか弾くんのだ。」

「でも、父さんが弾いてくれて仰つたから。」と少年は欣然と答へた。「すると、小川のさゝめきを聴きながら、緑の林の中を歩いてゐる心持になれるって、そして鳥だの栗鼠だのが……。」

「こゝら貴様は何者だ。何處から來たんだ。」と新右衛門は鋭く横槍を入れた。

「家から」。

「どこにあるんだ」。

「家——僕の住つてゐる家。山のずっと高い／＼——それや、高いところなんです。そして大きな大きな空が見えて、此處よりも、よっぽどいいです」。

少年の聲は慄へて途切れさうで、その眼は、始終、

草の上の父の白い顔に注いでゐた。

どうか處置をせねばと、此時急に新右衛門は、氣が付いた。

「この子供を家へ連れてゆきなさい。」と手厳しく彼は指圖をした。「今夜は、泊めてやらなくっちゃなまゐるまい。

おれは銀田のどこへ行つて来る——あの男の手にこの一切を移さなくちやなるめいから。御前、こゝに用は無い。」と御内儀さんの物言ひたげな顔付を見て彼は言ひ足した。「こゝはこの儘にして置け。その男は死んでるんだ」。

「死んでゐる？」

少年は鋭く一聲叫んだが、その聲に怖れよりも、驚き怪しむ心持の方が表はれて居た。

「父さんはあの——小川の水みたやうに——遠い國へいつてしまつたんですか。」と彼はよどみ／＼訊いた。新右衛門は眼を見張つた。それから、一層はつきりした調子で、

「御前の爺さんは死んだだよ」。

「そして、もう歸つていらつしやらないの」。といふ民雄は泣聲になつた。

誰も返事をしなかつた。内儀さんは鳴咽するやうに呼吸をして顔を背向けてしまつた。さすがの新右衛門も少年の訴へるやうな眼を見得なかつた。

民雄はアツ：といひさま、父の傍に跳んでいつた。「だって、父さんは此處にいらつしやる——チャンと此處にいらつしやる。」と早高聲に拒つた。「父さん、父さん、僕に何か言つて頂戴！民雄ですよ」。といつて、手を伸してソツと父の顔に觸れた。そして忽ち手を退き、恐ろしさに眼を圓くして、

「父さんは居ない——いつてしまつた」。

と氣が狂つたらしく喋り出した。

「こゝに居るのは解る方の父さんでない。あとに置いて行くあの部分のなんだ。父さんは之を置いていつたんだ。——栗鼠だの、小川の水みたやうに」。

忽ち少年の表情が變つた。冴え／＼と悦ばしい顔をして跳び起きながら歡喜の聲で、

「父さんは、僕に弾いてくれと仰つたから、父さんは歌を唱ひながら——同歌ひながら——行くんだつて仰つた通りに——いらしたんだ。父さんが、小川のさゝめきを聴きながら、緑の林の中を歩いて行くやうに、僕がして上げたんだ！聴いていらつしや

い、かういふ風に」

と、少年はバイオリンを頤に當てた。呆れ惑つてゐる新右衛門夫婦の耳には、また樂の音が軽く戦々、波に躍つた。暫らくは夫婦ともに言語も無かつた。

二人の生活——あの平凡な、馴れて苦にもならない野良仕事や、鍋釜洗ひ——の生活と、この光景——月の射し込む納屋、死んでゐる見知らぬ人、その子が小川だの栗鼠だのと面白さうに話をして、哀歌のかはりバイオリンで舞蹈の曲を弾いてゐる——とは似ても似つかぬものであつた。やつと新右衛門は聲を出して、

「オイ、止せ！」と彼は怒鳴つた。

「貴様は氣狂ひ——ほんとに氣狂ひか。家へ行けつていふのに。」

少年は自失とした風であつたが、それでも穩順にバイオリンを仕舞つて内儀さんの後に蹤いて行つた。内儀さんは、涙で前後も見えぬ眼をして、階段を下へと案内した。

内儀さんは怖いと思つたが、また何とも知らず胸が迫るやうに覺えた。彼女の昔の記憶の中から別のバイオリンの音が——やつぱり少年の奏でたバイオ

リンの音が響いて來た。併し内儀さんはその事を考へたくなかつたのである。

臺所に入つてから、内儀さんは振り向いて少年を觀た。

「御腹が空いてゐるかい。」

民雄は躊躇した。女、牛乳、金貨の一件を忘れて居なかつたから。

「御腹が空いてゐるの——坊や」と内儀さんは口重くまた言つた。すると民雄の空き腹が言ふまいとす唇につい「はい」と言はせてしまつた。之を聽くと忽ち内儀は食物置場へ行つて、パンに、牛乳に、御まけに、民雄の見た事もない「ドウナツ」を山盛り皿に入れて持つて來た。

空腹な時に世間の子供が食べるやうに、民雄は、食べた。内儀さんは、與へた食物で御腹の空いたのが直る、かうした、ありふれた事實を現在に目撃して、すこし安心し、この風變りの少年も、やつぱり、さう變でないのかも知れないとやう／＼思ふやうになつた。

「何といふ名だへ。」思ひきつて尋ねて見た。

「民雄。」

「苗字は。」

「たゞ民雄。」

「だつて御爺さんの名は？」と口先まで出て來たのを内儀さんはやつと止めた。父の事を言ひ出したくなかつたので、

「どこに住まつてるの。」とこんどは訊いてみた。

「ずつと高い山の上。その山の上でね、毎日僕の銀の湖が見えるんです。」

「だつて一人でそこに居たんぢや無かろう。」

「え父さんと——父さんが——あの、行つてしまはなかつたうちは。」と少年は淀みなく答へた。

女は失策つたと思つて、赤くなつて唇を噛んだ。

「その事でなくね、——御前の家の他に家はなかつたのかへど。」彼女は口籠つた。

「え。」

「だつて御母さんはゐなかつたの——何處かに。」

「え、父さんの衣袋の中に。」

問ひ主があまり呆れた様子をしたので、民雄も少なからず驚いて、説明した。

「あゝ解らないんですね。母さんは天使になつてるんです。天使の母さんは寫真だけで、何にも此世に

置いておかないんです。その寫真をね、僕達は持つて居るの、父さんがいつでも衣袋の中に入れていらした。」

「さうかへど。」小聲にいつて、内儀さんは、はや眼に露を宿した居た。そこで優しく、

「そして、始終そこにゐたの——その山に？」

「六年居たつて父さんがいひました」

「でも一日中何をしてゐたの。たまには——淋しくなかつたかへ。」

「淋しい？」と少年の眼は不審さうだつた。

「あゝ、いろんな人だの、家だの、御前位の年の子供だの——何だのそういふものが戀しくはなかつたかへ。」

民雄の眼はまるくなつた。

「そんな事はありやしない。」と彼は叫んだ。

「父さんと、バイオリンと、銀の湖とあつて、それから大きな、廣い林があつて、話してやつたり話してくれるものがそんな中に一杯居るんですもの。」

「林があつて、その中のものが——話をしてくれるつて！」

「え。」あの死ぬつて事を教へてくれたのも栗鼠で

ね、その次には、小川だつたの。そしてね……」

「あ、そうだ、もういゝよ。」と女は口籠りながら急いで起ち上つた、——この子はヤッぱり、ちと氣が變なのだと心の中に思つた。

「御前もう寝なくツちやいけけない。鞆かばんだか——何だか持つて來たかへ。」

「いゝえ。置いて來たんです。」と民雄は含笑して言譯をした。「中にあんまりいろく入れてあつたので、重くて持つてなくなつちまつたんです。だから持つて來なかつたの。」

「あんまりいろく入れてあつたんで、持つて來なかつたツて、まあ！」と口の内で内儀さんは繰返して、手が付けられないといふ態度で兩手をさし舉げた。

「御前は何者だへ、一體。」

問ひかけたわけでもなかつたのだが、少年が正直に無邪氣に答へたので内儀さんは吃驚くりしてしまつた。

「父さんがかう仰いましたよ。僕は人生といふ管絃オケ樂の中に小樂器ですツて。だから、いつでも調子をよく整へて、拍子のをのばしたり、ちがつた音を出さないやうに、氣を注げなくツちやいけけないツて。」

「まあ」と言つて、女は少年を見据ゑながら椅子に腰を下してしまつた。それから又、骨を折つて立ち上つた。

「さ、床とこに御入り。寝るのが——一番御前に宜さううだ。入用なものは——貸して上げるから」

それから間もなく民雄は、臺所の眞上まへのちいさな室に唯一人になつた。此室はもと民雄位の年の男兒の室だつたのだが、民雄は變たところだと思つた。壁には、生れて始めて見た敷物が敷いてあつた。壁には釣竿、玩具の鐵砲があり、身慄が出る程恐ろしい事には、甲蟲かぶとむしや蛾のピンで刺されてゐるのが一杯入つてゐる函もあつた。寢臺は四隅に柱があつて、上部がブクくしてゐるから、民雄は、どうして其上に登あがるのだから、また登あがれたとしても、どうしてそこに落付いて居られるのだから分らなかつた。それから男

兒用の黄ばんだ白地の寢衣ねまきが一枚椅子の上にあつた。之は御内儀さんがその端で涙をいそいで拭いて置いていつたものであつた。蠟燭の火の届く範圍で民雄の我家戀しい眼に、見馴れたものは唯一つあつた。——自分が持つて來た、そして大事なバイオリンの入つてゐる長い黒い函であつた。

壁の上のピン刺しになつてゐる甲蟲と蛾に態と背を向けて、民雄は黄ばんだ白地の寝衣に換へた。襦ひたの中に漂ふ匂が松林まつばやしの香に似てゐたので、嬉しくそれを嗅ぎながら。そして彼は唯一つある窓の方へ探り／＼歩み寄つた。

月はまだ照つて居たが、繁り合つた樹の爲に戸外がよく見えなかつた。下の庭の方から、車の音と、激げきした人聲が聞こえた。忙しさうに持ち運ぶ提燈のチラ／＼するのが見え、ひきづり足に歩く音もきこえた。民雄は窓のところで身慄こぞひした。山、岡、谷の廣い見晴しもなく、銀湖もなく、心を安める静さも、父さんもなく、——つまり實在する美しい「もの」は何一つもなかつた。唯あるものは、侘しい、空な賸あまの「もの」ばかりであつた。

ずつとしてから民雄は腕うでにバイオリンを抱へて敷物の上に仆れ、赤ン坊の時以來かやつた事のない泣き寢入をしてしまつた。併し身體の休まる睡眠ねむりではなかつた彼は自分が大きな白羽の蛾になつて、眞黒な空へ、星のピンで刺し貫かれてゐるところを夢に見てゐたのである。

#### ○文部省保育講習會

例年の通り今夏も文部省に於て保育講習會開催の由。當年は左の通り内定、尙詳細は追て官報に發表の筈。

#### 一、兒童の繪畫について

東京女高師教授

菅原教造

#### 一、簡易なる玩具の製作

東京女高師講師

藤五代策

#### 一、育兒に關する衛生

東京女高師講師

青木醇一

日本幼稚園  
協會主催

# 慈善大音樂會曲目

## 第一部

一、ヴァイオリン及ピアノ合奏〔高 蜂谷龍次氏  
折宮次氏  
氏

ト長調ソナタ(作品一三)……………ルーベンシタイン作曲  
Sonate (G Dur, Op. 13)……………Rubinstein

## 二、バリトン獨唱

い、薄暮の夢……………ントラウス作曲  
Traum durch die Dämmerung……………Strass

る、秘密……………ウオルフ 作曲  
Verborgtheit……………Wolf

は、遊歴者……………シュールベルト作曲  
Der Wanderer……………Schubert

## 三、ピアノ獨奏

蝶の曲(作品二)……………シューマン作曲  
Papillons (Op. 2)……………Schumann

## 四、ソプラノ獨唱

い、曉の花と心は開く……………サン・サーンス作曲  
„ Mon coeur s'ouvre a ta voix ”……………Saint-Saëns

る、歌劇「ファウスト」中の寶石の歌……………グーノー作曲  
Juwelen Arie aus „Faust ”……………Gounod

武岡鶴代氏

川上清子氏

## 五、ヴァイオリン獨奏

流浪氏の節(作品二〇)……………サラサーテ作曲  
Zigunerweisen (Op. 20)……………Sarasate

## 第二部

## 六、松竹梅(三曲)

箏 今井慶松氏  
三味線 山室千代子氏  
尺八 荒木古童氏  
芳村孝次郎氏  
芳村孝太郎氏  
芳村孝三氏

## 七、勸進帳(長唄)

長唄 今藤長十郎氏  
三味線 杵屋五三郎氏  
三味線 杵屋勝藏氏  
笛 西川鉦二氏  
小鼓 六合新三郎氏  
同 梅屋勘兵衛氏  
大鼓 六郷新十郎氏



# 日本幼稚園協會役員

會長

湯原元一

主幹

倉橋惣三

幹事 (イロハ順)

井村くに

池田トヨ(會計)坂内ミツ(庶務)星野樂和野田實

和田くら

梶原梢土川五郎(編輯)及川ふみ向井琴柱

小向きみ

小山はな小高つや(編輯)及川ふみ

評議員 (イロハ順)

乙竹岩造

吉田熊次田中ふさ野口幽香安井哲

榎山榮次

藤井利譽下田次郎日田權一

地方委員 (イロハ順)

折井彌留枝

大和田りよう坪内きく字式かん久住モト

坂井ふで

司馬のぶ望月くりに勝たけ

## 加盟保育會

東京市保育會

京都保育會

大阪市保育會

神戸市保育會

静岡縣保育會

名古屋保育會

香川縣保育會

福島縣保育會

吉備保育會

本誌は最も平易な、最も教育的な子供繪雜誌たるべく苦心して居ります

# コドモ

編輯顧問 高島平三郎先生

# 幼垂 雜誌 良友

本誌はコドモの兄様姉様に當り、小學生の讀物として最も適當な雜誌です

明治三十四年一月二十八日第三種郵便物認可(毎月一同十五日發行)

幼兒教育 第二十卷第六號

大正九年六月十二日印刷發行

印刷所 合資會社 杏林 舍

近來子供雜誌や繪本類が非常に多くなつて、既に二三十種に達してゐる。世の父兄諸氏は、この多くの同種中、はたして何れを子弟の爲に選べるゝであらうか單に玩具と見做して、その選擇を慢然兒童の取捨に一任して置いてよいであらうか。

發行所 東京市小石川區番七十五 社モドコ 電話 六一八二 六一九二